

# NEWSLETTER

THE JAPANESE SOCIETY FOR  
PARAPSYCHOLOGY

June 1979

No. 15

## 夏期研修会の お知らせ

今年度夏期研修会を来る8月24(金)25(土)26(日)の3日間、茨城県日立市で行うことになりました。実施に当たっては、六車正道氏にお話をいただいたべく、様々のご承諾をいただきました。実施要領も同封致しましたので、多数の方々の参加を期待致します。

## 超心理学 本邦文献

新屋重樹:ESPと記憶(2) 鹿嶋島経大論集 第20巻 第1号 pp.115-133. 1979. 本論文に引続き記憶とESPについての諸研究(Feather, S. R. 1967, Stanford, R. G. 1970, Kanthamani, H. and, H. H. 等)を同様に紹介し、ESPと記憶の関連を示す事実が発見されたことを示している。

## 書評

K. オシス, E. ハラルトソン: 人間が死ぬとき  
(たま書房刊. 1500円) 望原敏雄訳

死後人間はどうなるか。このテーマは人類の歴史と共に在り、最近色々な医学者、心理学者、超心理学者等によって新しい視点と方法のもとに取り上げられている。著者の一人OS: SはA.S.P.R.の特別研究員で20数年にわたってこの問題と精力的に取り組んで来た。彼は心理学者のHaraldssonと協力し多数の医師や看護婦にアンケートを送り、臨終の病人の異常な知覚体験についての調査と分析を行った。事例総数は約500でアメリカ合衆国とインドの二つの文化圏からのものがある。データは厳密なランダム・サンプリングにより集積され、コンピュータによるパターン分析が行われた。瀕死の病人の所に親しい死者の霊魂があらわしく、彼を連れ去ろうとしたり、この世のものとも思われない美しい世界を体験したりしてその報告が採られた後すぐに患者が安らかに去るというものがこの2つの文化圏のパターンである。この体験はむしろ意識の最後まで清明な患者に見られ、脳障害や薬物の影響によるものでないことが確認された。また耳合、性別、死後の世界への信仰、教育程度と相関があまりないことが判明した。オシスは約1/4から1/3の数がこの世の事

柄にルーフを二つのに押し、約3/4は来世を暗示する内容を持ち、それはESPを介してあの世を覗き見たりであろうと述べている。彼は“来世仮説”と“死後仮説”のいずれかはこの現象を説明出来る種々の項目別に検討し、前者に軍配を上げている。しかしこの二つの仮説の提出の仕方、さらに単に客観的に死後の世界の存在を確認したかについては大いに疑問の余地があるだろう。死後生存の問題の厳密な現象論的分析の上に考へるわけならばむしろここで本書は多くの研究者に大いに刺激を与えるものと思われ。記者の望原氏は心理学法の専門家である。氏の訳文は正確かつ流麗である。この問題に関心をもち人達に是非一読を奨めたい。(金沢元基)

## 学会 ニューズ

第134回月例研究会 / 1979年6月17日(日) 1000-1600, 学士会館本館にて開催。出席者 秋山栄子, 夏鶴, 金沢元基, 望原敏雄, 本滑清一, 六車正道, 大谷宗司, 佐藤一郎の8名。六車氏によるJ.B. Rhine: Extrasensory Perceptionの翻訳の発表。望原氏による“念は実験の実施計画”の説明検討が行われ、続いて、夏氏による中華民国における超心理学の研究の現状について報告が行われた。後、誌上発表の検討が行われ、引続き総会が開かれた。

## お知らせ

第135回月例研究会の開催 下記の要領で次回月例研究会を開催致します。

期日 / 1979年7月22日(日) 1000-1600  
於 学士会館本館 東京神代田区神田錦町3-28  
03-292-5921, (地下鉄有楽町線竹橋駅)  
Handbook 輪読 J.B. Rhine: Extrasensory Perception  
担当 六車正道・金沢元基  
討論: K. Osio: “人間が死ぬとき”について  
説明 望原敏雄

NEWSLETTER 1979年6月17日発行 価額 200円  
編集・発行 日本超心理学会

### 中華民国に対する超心理学研究の現状

中華民国超心理学研究会 副總幹事 夏 鶴

皆様、私は台北から日本へ参りました夏鶴でございます。私は日本超心理学会の外員の一であり、今回の研究会に参加致しまして誠にうれしく思います。

今日は、中華民国超心理学会の状況について報告致します。皆様のお役に立つことがあれば幸に存じます。

中華民国超心理学研究会は、ソフツワリ三月に設立されました。成立当時の会員数は約200、現在は300名以上に増えています。会員の平均はソフツワリから8ソフツワリまであり、職業も、国会議員、大学教授、会社社長、社員、中小学校の先生、医者、看護婦、大中学生、家庭主婦などあらゆる社会各層の人々を参加してあります。しかし、超心理学に対する認識、考之方、研究の道は仲々一致しないのが現状であります。

我々の研究会では、色々な研究組を設定して活動しており、それらは、心霊科学、霊力開発、精神治療、ESP実験、心霊障に合われます。各組の成員は、3〜5名から10余名であります。この組が生まれてから1年以上経過しました。あまりはつきりした成績はあつておりません。ただその中でESPにつきましても、日本超心理学会と協力して、東京-台北間の長距離ESP実験を行いましたことは、その成績は必ずしも目を見えるものでありませんでしたが、台湾で国際的な実験をしたということも重要な意義をもち、また広く影響を及ぼす効果がありました。この点、日本超心理学会に感謝するものであります。

精神治療につきましても、昨年より3回精神治療講座を行い、成果を得てあります。1回につき2〜30名の参加者がありましたが、1週2回、各回3時間、全部で2ヶ月に亘る授業をしてありますが、受講者の色々な病気を治してあります。この方法の特色は、受講者の5〜6名を1組とし、これらの人の精神を導いて、一人の病人に対し、効果を与えるものであります。この講座の立役者徐鼎銘教授は、この精神力を「人電」(human electricity) という名前をつけてあります。

また、私共の学会では、霊媒を一生懸命に探してあります。そしてこれまでに2人優秀な霊媒を見つけてあります。

一人は、カセラをする人ですが、この人は病気を治すに絶好の念を取りません。研究会では、本年6月から実際の状況と詳しく調査することにしてあります。結果は、各国の超心理学会へ報告する予定であります。他の一人は、予言をよくする人で、その人の予言によりますと将来4〜5年の後(1980年頃)には、中近東の地方にUFOPの火山に着陸する。その頃は、丁度、自由世界と共産世界との間に戦争が勃発する寸前の状態に陥っており、その宇宙船で地球に来た人達が、その戦争を止めるように忠告をする。UFOPの中の人々は、牛人類半霊体であり、人類の文明が戦争により破壊され、人類の終末を迎えるのを救ってくたさるのである、という。この説が事実となるかどうか、皆様も一応留意していただきたいと思います。

次に、これは私の個人的感想であります。超心理学は、どの国に於いても、まだ一般に受け入れられておりません。研究は矢張り個人的なものであり、超能力を持っていない人、予知のできない人、霊力で病気を治す人、みんな人の能力であります。私の信念としては、超心理学は、こゝろを学術的理論と捉え、科学的に証明可能なものであると考へます。宗教的背景をもち、迷信的な話に終るとして、絶対に私達の選んだ道ではありません。

今回、私は日本へ参りまして念写の研究もしたいと思つてあります。もし、皆様念写の研究資料をお持ちでしたら、お教之いくださいと思います。

以上簡潔ですが、我國の超心理学の現状について報告申し上げます。尚清聴を感謝致します。



Handbook of Parapsychology 論説

Jan Ehrenwald: Psi, Psychotherapy and Psychoanalysis

訳者 渡辺恒夫

(要約)にこの紹介されるのは、一般に唯物論的合理的主義者のみ目をこぼすフロイトの意外の側面であり、かつ、現在に至るまで引続いてる精神分析の発展史に於ける知られざる一潮流である。

近代の心理療法の潮流は、たいていは科学的因果的理論構成に支脚しているが、なかでもフロイト的精神分析は最も非妥協的かつ首尾一貫した例であるといえる。ところがこのフロイトは、表面に理論構成からは追放し得る神祕的オカルト的なものへの個人的関心で終生をまといまわっていたというのには、何とぞ奇異な景観がある。実際、多くの論文の中でフロイトは、専ら精神分析療法においてテレパシーの働きを役割を、あなこねと論じてきてきたのである。

1922年の論文の中でフロイトは、自分の観察の公表を「わがわがの科学的な世界像が損なわれまいか」という怖れから、10年近くもためらって来たことを告白している。最初の事例は40歳の婦人神経症患者のものであった。27の時彼女はおばりであるが、師に、32才で子を2人持つだろうとの予言を受け取ったのだが、彼女はいまに子供はいない。にもかかわらず分析は、右の師の言と現実との驚くべき合致を明らかにしたのだった。彼女の母親は丁度32才で子を2人出産したのであり、かつ、無意識の空想の中では彼女は母親の位置を占め、父親を唯一の恋人としていたのだった。右の師が予言と称して言い当てたのは彼女の無意識の観念と願望であり、右の師の判別する情報の根拠から考えても、偶発的なテレパシーの介在に懸念しない訳にはいかない。二番目の事例も予言に關するもので、最愛の妹が結婚するのと同時期に神経症に陥り、青年に起ったことである。分析は妹の強度の固着と(結婚相手の)義弟への敵意を明らかにしたが、彼はそれを厳しく抑圧していた。分析開始後もなお彼は占星術師を訪ね、証言集団によって義弟の将来を占ってもらい、次の夏にカキカカニの中毒で死ぬだろうという予言を得た。この場合も予言はそのものとして実現しなかつたのであるが、義弟は実際

以前カキカカニの中毒で死にかけたことがある。それゆえ、「このような食道事はやめらなさいものだから、いつかそれで身をまぼすだろう」といった義弟への無意識の敵意ある期待を、その見事に代弁して下さるのである。このままに超常的交信手段によるものと解することでは済まないのである。

以上の二例の記述には又開きという欠陥があるが、フロイトは、作業仮説を与えるには充分なものを見つけていたようである。すなわち受け手の心に再生されたものは、半抑圧状態にある情動的歪曲の観念群(送り手の)であって、結局、受け手の感応し場としての、「一次過程から二次過程への推移状態にあり送り手の心的内容」なのである。この他にフロイトは3例の、分析治療中彼自身送り手を演じることを述べたと同じような出来事を報告している。一番目の事例は、ロンドンの分析家Forsyth博士が訪ねて来た日に、フロイトがそのことに心を奪われた丁度その時に面接中の患者が、Mr Furesight (Forsythの語と酷似)の独語とよいうべき Herr von Vorsicht (漢字居士)という言葉を出したことであり、二番目の事例は、悪夢に關する著作で有名な Jones 博士を述べた日に、やはり患者がnightmare (悪夢)の語を偶々発したことであり、三番目のそれは、フロイトが友人Anton Von Freund氏を訪ねようと考えていた丁度そのとき、言い違ひとして患者の口から同じ言葉が出たことである。フロイトはこれら三例に共通した要素として偶々分析家の注意を奪ってしまった未知の人物に於ける、患者の側(テレパシー的)の候補を指摘している。

フロイトのオカルトへの関心は、吳米双方のS.P.R.に加盟して来たことから窺い知られる。H. Carringtonへの手紙の中で彼は、もし呪いをやり直せるとしたら、サイキカルリサーチに身を捧げていただろう、とまで述べているのである。とはいえフロイトは、究極的には、サイキカルなものを自己の金体的思想体系に統合しようとしなかつたといふことは分からずにはなからぬ。彼の態度はあくまでも、フンボルト的なものにとどまっていたのである。

他方、ユングの起自然に於ける一貫した関心は、殊くその性格の輪に根拠し得るのであり、子供時代まで遊ば

かどまるとのことであった。フロイトとは異り、彼自身体験に多様な超常的現象は、彼の思想体系と完全に両立しうるものなのである。数多くの挿話的観察がこの著作中に散在しているが、最も有名な例は、おとこは、彼と母との眼前で包丁が4つに裂けたというもので、彼は、この出来事を、当時研究の対象としていた親戚の聖隷的少女に帰し、のちに断片の写真をライオンズに送りつけて貰った。また、同じ頃には、望遠鏡の上部が裂けた。フロイトの会見中ユングの「ホルターガイスト」が騒いでフロイトを驚かせたりといった、同様のPK的出来事があるが、多くは臨床の伝承に関連して生じたものである。ある事例では彼は、患者の一人が頭部を撃ち抜いて自殺したのと同時に頭部に銃弾を食って目醒め、誰かが部屋に入ってきたのを感じた。もっとも知らずに事例では婦人患者が、前夜金色の甲虫を置いた夢を見たと言っている下宿の時、背後の窓がガラスに合図のような音を聴く。見ると大きな甲虫で、ユングはそれを、こくに貴女の甲虫かいるよと之を患者に渡す。この経験は彼女の合理主義の障りついで壁の穴を穿ち、治療を望まぬ方向へ転換することをなす。と彼は述べている。この最後の例は、Synchronistic Phenomena (同期的現象) の名のもとにユングの述べているものの在地的な事例であり、「出来事の間の有意なる符合」と之を述べるものに基いている。彼はこの種の有意なる符合は治療の成否の鍵となるものである。と示唆しているが、不幸なことに、同期的出来事は、本質的に療法家の意識の範囲を超えて、外部世界からのまぎれなき侵入でもある。それゆえ、分析的心理学においてPsiの果たしている真の役割は、ユングの体系においてこそ最も明確に述べられている。科学的観察と個人的神話という、治療的実践における相反する二つの原理は、調停されぬままになつてしまつたのである。

フロイトによって方向づけられたテレパシーの力論的解釈は、その後Hallós(1933) Servadio(1935), Burlingham(1935) などにあって発展させられて現在に至っている。中でもEisenbudはPsi and Psychoanalysis(1970)において、分析治療の理論と実践の双方にわたるサイ現象の意味を、初めて包括的に提示しようとした。彼はサイ現象を

重要な採集手段と考へ、治療において公然と用いようことを提議し、テレパシー的解釈のみならず、夢の力論的解釈についてしばしば逢着する空隙を埋めてくれる。と云う。またColeman(1958)は患者・分析者・スーパーヴィザーの三者間に生じるテレパシー的出来事を、「超常的三角関係」と名づけて研究した。更にUllman(1949)は、テレパシーの内面的個人に起る事から、対人接触の回復という機能を持つのも確かであると示唆した。その後、周知のREM状態でのテレパシー実験を通じて自説を発展させた。サイ効果とはとりわけ「夢見者に対して重要な対人関係が脅威にさらされているときに生じ易く、「外界との絆を維持しよう」という要求の中から浮上して来る受信手段」なのである。これに対しEisenbudはサイの機能を「個人的なそれではなく、「個体が単に伝達物質に過ぎないようなある階層組織系に於ての」機能と考へたが、これはむしろフロイトよりもユングに近づくべきであろう。またEhrenwald(1955)は、自我・Id・Psiの3つの水準を統合する「三水準療法」なるものを提唱している。しかしながら現段階では、Psi水準でのアプローチと科学的心理療法との最終的統合は、まだまだ夢物語に過ぎないであろう。サイの検証が本質的には、実験的統計学的手段によつてなされて来た以上、サイの治療場面への導入とは、いまだ証明されざる仮説にとどまるのであり、近代精神医学の体系にとってPsiの問題は現在までに影響を与えたと云うものは、まだまだ萌芽状態ではない。と云ふのである。

(記者付記) サイを扱つたフロイトの論文の主要なものは以下の3頁である。

1. Psychoanalysis und Telepathie. 1921. Gesammelte Werke Bd. 17.
2. Traum und Telepathie. 1922. Ges. Werke Bd. 13.
3. Traum und Okkultismus. 1933 In Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. Ges. Werke Bd. 16. (邦訳: 続精神分析入門 第三講「夢と精神主義」)

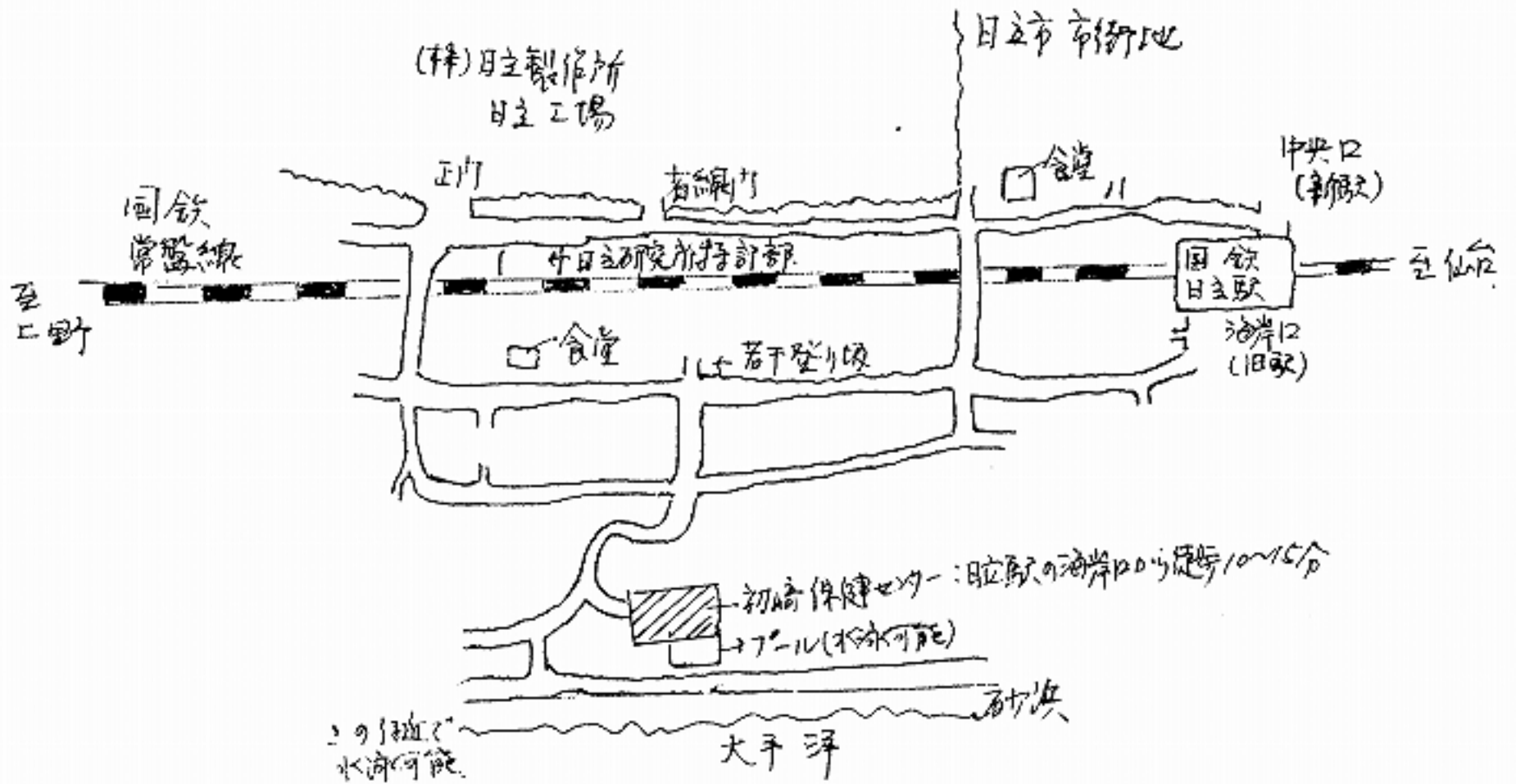


## 第10回超心理学夏期研修会案内

今回は、大車正道氏の好意により、下記の要領で開催することになりましたので奮って参加下さい。

### 記

期日： 1979年8月24日(金)～26日(日)  
 場所： (株)日立製作所 初崎保健センター  
 茨城県日立市旭町3-20, (0294) - 22-2215  
 23-4383



日程： 24日(金) 午後1時会議室に集合  
 研修 コンピューター入門  
 コンピューターの脳科学研究への応用  
 午後6時半～9時 懇親会  
 25日(土) 午前8時～12時  
 研修 コンピューターを用いた脳科学研究  
 念珠研究の結果報告  
 午後1時～5時  
 研修 コンピューター端末を用いたESP PK実験  
 26日(日) 午前中 原子力研究所等見学 解散

費用  
 宿泊費 3,000円/人泊(和室2食付)  
 懇親会費 3,000円/人  
 研修会費 1,000円/人

参加が予定の有意者を、同班のハガキを用いて、7月15日(日)までに1切返送下さい。  
 尚意見等ありましたらお書き添え下さい。